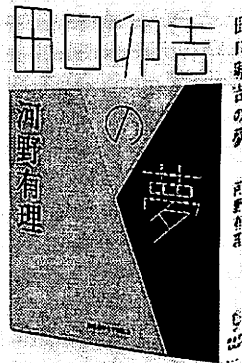


市場経済が目指す秩序

河野有理著

田口卯吉の夢



(慶應義塾大学出版会・csc000E)

「格差」や「貧困」が新聞の紙面に頻出するようになって久しい。市場経済がこれほど批判にさらされる時代はないのかもしれない。そもそも市場経済が目指す秩序とはいかなるものなのか。本書は、忘れられた明治の思想家、田口卯吉に光を当て、「交易」や「分業」のネットワークという市場経済の秩序構想を考究する。主著『日本開化小史』を中心に、経済学者であり歴史学者、理論家であり実践家でもあった田口の重厚な世界観が余すところなく論じられている。

明治維新とは、世襲領主による分権的な「封建」から中央集権的な「郡県」への移行であった。本書の着眼点はここにある。西洋を目標とした「文明史」ではなく、人間社会の普遍的展開としての「開化史」を模索する田口は、経済的な観点から「封建」と「郡県」を再定義する。前者が経済的保護主義の現れであるのに対し、後者を開放的な市場社会とみなす。つまり、「郡県」を開かれた市場空間と位置づけ、中央集権を市場や交易といった点から理解するのである。

「封建」と「郡県」の対立は、市場が共同体の倫理を破壊することを危ぶむ「徳」と、市場の自立的形成能力を信頼して共同体の再構築を企図する「商業」との対話でもあった。市場経済への移行期となった明治時代、個々の「私利心」が衝突する社会への嫌悪感や道徳的批判が広がった。だが、田口は「私利心」を社会の基礎に置き、真正なる利己主義は道徳的に劣るものではないと考える。「私利心」や「自愛」が他者との「交際」へと開かれるところに、まだ見ぬ社会秩序を夢見た。表題のゆえんである。

「徳」を失った「商業」。それが現代の市場経済の姿かもしれない。そうであるとすれば、私たちの課題は「商業」の空間から「徳」の位相を取り戻すということにあるのではないだろうか。過去から学び、現在を顧み、そして未来を示唆する若き思想家の労作である。(九州大准教授・政治学 大賀哲)

こうの・ゆうり 1979年生まれ。日本政治思想史。首都大学東京准教授。